

# 『北溟新聞』第一号の記事

安宅 俊介

## ●はじめに

新潟県初の新聞は『北溟新聞』とされます。木版の綴で、官許。第一号は価三錢五厘。「新潟懐古資料」には「部数も漸く二百部内外が多い時でも三百部が関の山」とあります。発行者の坪井良作は医師の子で、漢学をまなび、明治以降は自由民権結社「自立社」を設け、のちには裁判所判事となつた人でした。

同紙のはじまりについては、回顧や聞き取りといったものも多く、はつきりとはしていません。たとえば、新潟市所蔵の同紙第1号の表紙には「明治壬申」(一八七二年)、奥付には「二月」とありますが、発行月を「三月」とするものもあり、諸説あります。こうした事情から新潟県初期の新聞史の検討には慎重さが求められますが、本ノートでは、同誌第一号の記事を二、三紹介します。



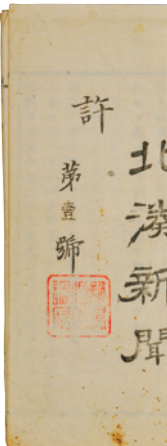
坪井子敬(良作)碑(白山公園内)

## 一「開化」

『北溟新聞』第一号は「新聞発行ニツケテ或人之ニ歌ヲ投セリ曰」とはじまります。その一歌は「花ノ如栄ユル御世ノ春ニアヒテ人ノ智モ開テソク」という、「開化」していく世を、開花に喩えたものでした。この冒頭が象徴するように同紙は「開化」啓発色の強いものでした。歌のあとにつづく記事も「新斥ノ洋学校追々盛ニ相成当春ハ寄宿生徒凡五十人余ニ及ヘリ仏語并数学ノ科モ相立可申候生徒伝信機出来候(略)」というものでした。このほか同紙には、牛肉や牛乳を食べることの功益や「米搗織物并挽物轉ノ器械」の発明、蒸気船完成の記事なども掲載されています。なお、こうした記事には小見出しにあたるようなものはありません。

## 二「金色ノモノ」

現代に生きるわたしたちにとって、不思議に感じる記事も掲載されています。明治四(一八七二)年十二月十八日、蒲原郡十五間村(現在は南区)の今井熊太郎は、庭に伏せ置いていた白石の上でワラを打っていました。すると石の下で「鳴動」がありました。そこで石を取り除くと「金色ノモノ」が見え、六〇から九〇センチ掘ると石がありました。石は「平円丈ケ一尺二寸巾八寸厚サ五寸」、重量は「六貫目余」で「クボミタル処」があり、そこは「真ノ金色」だったそうです。同紙によれば、この件は県庁に届



『北溟新聞』第一号(新潟市所蔵)

け出がなされたといえます。実在した何かの遺物なのか、それとも人目をひくための作り話なのかは分かりませんが、「開化」をうたい「官許」された同紙にこうした記事が掲載されていることは、この時代を考えるうえで興味深いところがあります。

## 三「鉄路」と「名和氏」

ところで、港町であった新潟において鉄道運送の必要性が意識されたのは、いつ頃のことだったのでしょうか。むずかしい問題ではありますが、同紙はすでに「アメリカ在留名和氏ヨリ贈リシ書ニ北越之急務ハ洋学ヲ開クト東京迄鉄路ヲ造リ運送便利ナラシムルニアルシ云々」とそれを伝えていました。いまだ品川駅―横浜駅間の鉄道仮開業すらおこなわれていないときです。

この「名和氏」は名和緩(道一)と考えられます。名和は長州藩の岩倉具視につかえた人で、新潟にも縁があり水原県参事をつとめています。渡米して明治六(一八七三)年ボストンにて客死。坪井との関係はよく分かりませんが、あたらしい「考えかた」が伝わったルートの存在がうかがえます。

なお、名和は、幼少の頃の市島謙吉とも奇縁がありました。市島は、のちに現在の新潟日報の源流のひとつ、明治十(一八七七)年創刊の『新潟新聞』主筆を明治十九(一八八六)年からつとめた人です。市島は『春城筆語』のなかで「忘れら

れた一人物名和緩氏」という項を立てています。それによれば市島は、名和の居所であった旧陣屋に「兎に角毎日通つた」とされ、名和から「本を教へられた」といいます。市島は「素読を受ける時は物やさしく懇切に教へられ」「若死をせなんだら無論台閣に列した人であろうと思ふ」と名和を評しています。

## ●おわりに

同紙のおわりには、家や土地、器具などの売却あるいは新規開店について「三字一行を四錢五厘で告知すること、また『新聞珍説風説等』があったら、『投新聞箱』に住所と名前を書いて投書すべき旨が書かれています。

紙幅の都合でわずかししか紹介できませんでしたが、『新潟市史』資料編5で同紙1号を読むことができます。ご興味があれば、ぜひご覧になってください。

## 【おまな参考文献】

- ・松井敬「新潟県新聞史」『地方別日本新聞史』日本新聞協会、一九五六
- ・新潟市史編さん室「新潟市史」通史編3近代(上)、一九九六
- ・新潟市史編さん室「新潟市史」資料編5近代1、一九九〇
- ・新潟市史編さん室「高橋亀司郎氏旧蔵『北溟新聞』について―北溟新聞あるいは『新潟県治報知』以前―」『市史にいがた』七一九九
- ・新潟日報社編「新潟日報源流130年 越佐新聞略史 時代拓いて」新潟日報社、二〇〇七
- ・妻木忠太編「木戸孝允遺文集」泰山房、一九四二
- ・市島謙吉「春城筆語」早稲田大学出版部、一九二八

(あたか しゅんすけ 学芸員)

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二



# 館長日記

Diary from the Director of a Museum

## 「旅愁」作詞者の名前

先年、「いま、ケンドウとおつしやいましたがね、インドウのはずですよ。」というご注意を受けたいことがあります。それは唱歌「旅愁」作詞者を、私が「ケンドウ・キュウケイ」と言ったためです。「エー、そうなんですか!」と私は驚いて「はい、確かめてみます。」とお答えしたのですが、その折に連想したのは、子供のころに新潟市近郊の農家の方に、「ほれ、インガに嘸かまればよ。」と注意されたことでした。「インガ」とは犬のことです。

さて、調べてみると、「旅愁」の作詞者は、御指摘の通り犬童球溪でした。名は信藏、ペンネームは出身地熊本県の人吉市を流れる球磨川に由来しています。明治三十九年から四十二年まで県立新潟高等女学校で音楽の教鞭を執つていて、「旅愁」はその時に作られたのです。

犬童氏は、鎌倉時代に人吉荘の地頭であった相良氏の一族で、由緒正しい、九州では珍しくない姓のようです。また、中国・四国地方では犬神様を「いんがみさま」と言うそうです。故郷では



新潟中央高等学校(旧新潟高等女学校)にある「旅愁」の碑

「ケンドウ」などと呼ぶ人はいなかったのでしょうか、遠い異郷の新潟では私のように間違つて読む輩ばかりだったのかもしれない。そのつど「旅愁」の歌詞にあるように「さびしき思いに一人悩む」ということもあったでしょう。

ところが小林存は「越後方言考」で、私が連想した「インガ」を新潟市採集の方言としてあげています。「イヌ(犬)の訛言のインに接尾語の「ガ」が付いたもの」と説明しているのです。私の連想もあながち的外れではなかったようです。犬童球溪が九州と同じ訛りが新潟にもあることを知っていたら、「さびしき思いに一人悩む」ことなく、「旅愁」も誕生していなかったかもしれない、などと考えたりするのです。

## 収蔵資料紹介

### 「現代新潟風景画展」出品作家作品群

「絵画」は美術館だけでなく、みなとぴあにも収蔵されています。美術館はその造形性の評価を受けもつとすれば、歴史博物館は、制作の背景にあった人々の営みに注目します。みなとぴあにあって作品はどれも、新潟の歴史の一面を語る雄弁な資料なのです。

みなとぴあの前身である郷土資料館では、昭和四十九(一九七四)年度から二十九年間にわたつて、毎年秋に「現代新潟風景画展」が催されました。出品者は毎回三十人ほどの市在住画家たちで、彼らが市域に画架を立てて描いた同時代の風景画が展示されたのです。ときに作品が資料館に寄贈されることもあり、最終的に四十一人の七十一点が収蔵されたようです。これが、その後みなとぴあにひきつがれた同展覧会の出品作家作品群です。

西洋における風景画は、注文画を否定した十九世紀の画家たちが、ありのままの自然を受け入れることで「発見」した比較的新しい形式でした。そのため明治期に美術を「輸入」した日本人は、最初から野外の写生を西洋画の基本として受容したのです。新潟でも旧制中学の「立雲会」や、師範学校の「亜倶楽会」といった愛好会が、ほぼ独学で写生画を研究しています。



唐沢治一郎「'89春 市役所本館付近」(キャンパス・油彩、1991年)

(木村 一貫 学芸員)

風景画は衰退するのですが、写生の指導は戦後の小学校で生き続けました。昭和二十六(一九五二)年に学習指導要領が全面改訂されると、自然を観察させる写生会が全国で流行したのです。現代新潟風景画展には、図画や美術を教えた学校の先生がたくさん参加していました。戦後新潟で風景画が愛好された背景には学校教育の影響があったといえるでしょう。ただ、純粹に自然を追った戦前と違い、同展が趣意としたのは、失われつつある景観でした。風景画を描く行為が、新たな社会性を帯びるようになっていったのです。

美術において時代の同一性を示すのは、描かれた対象ではなく、意図と形式です。この作品群は、絵画の営みと博物館活動が結びついたユニークな資料なのです。